

小説 IV

- | | | |
|-----|---------------|-------|
| I | 1910年代のアメリカ小説 | 井上 謙治 |
| II | 1920年代のアメリカ小説 | 野崎 孝 |
| III | 1930年代のアメリカ小説 | 浜本 武雄 |
| IV | 第二次大戦後のアメリカ小説 | 宮本 陽吉 |

講座 英米文学史 第11巻 © K. Inoue, T. Nozaki,
小説 IV T. Hamamoto, Y. Miyamoto

1981年 9 月 20 日 初版発行 定価 2,500円

検 省 印 略	責任編集	朱牟田 夏 雄
	著 者	井 上 謙 治
		野 崎 孝 雄
		浜 本 武 雄
	発 行 者	宮 本 陽 吉 夫
		鈴 木 敏

発行所 株式 大修館書店
会社

101 東京都千代田区 神田錦町 3-24

電話 (03) 294-2221(大代表) 振替 東京 9-40504

装幀 原 弘 組版・印刷 大文堂 製本 三水舎

Printed in Japan

講座 英米文学史

目 次

I 1910年代のアメリカ小説 (井上謙治)..... 1

1. 概 観 3
2. セオドア・ドライサー 9
3. シャーウッド・アンダソン 16
4. シンクレア・ルイス 21
5. イーディス・ウォートン 26
6. ウイラ・キャザー 30
7. エレン・グラスゴー 35
8. ガートルード・スタイン 38

II 1920年代のアメリカ小説 (野崎 孝)..... 41

1. 概 観 43
2. F. スコット・フィッツジェラルド 47
3. アーネスト・ヘミングウェイ 53

vi 目 次

4. ドス・パソス	61
5. ウィリアム・フォークナー	68
6. その他の作家たち	80

Ⅲ 1930年代のアメリカ小説 (浜本武雄).....85

1. 概 観	87
2. ジョン・スタインベック	91
3. ウィリアム・サロイアン	98
4. アースキン・コールドウェル	101
5. トマス・ウルフとキャサリン・アン・ポーター	104
6. ナサニエル・ウェスト	108
7. 左翼文学	111
8. 黒人文学とリチャード・ライト	115

Ⅳ 第二次大戦後のアメリカ小説 (宮本陽吉)··· 119

1. 概 観	121
1. 統一されたアメリカ	121
2. 順応主義への反発	123
3. 新人たちの成長とリアリズムの行詰り	125
4. 作家のノン・フィクションへの進出	126
5. リアリズム以後の作家たち	127

6. 小説の方法の再検討	129
2. 戦争小説	131
1. 大戦が終わって	131
2. 夢のない戦い	133
3. 戦争小説の作家たち	134
3. 南部の小説	141
1. 政治・経済面の貧困と文学の隆盛	141
2. 南部作家とは・・・	143
3. 南部の作家たち	144
4. 黒人文学	158
1. 曲り角にきた黒人文学	158
2. 多様な黒人作家たち	159
5. beat generation と hippie たち	167
1. 市民社会への反逆	167
2. ジャック・ケルアックとウィリアム・バロウズ	169
3. beat generation から hippie へ	172
4. ヘンリー・ミラーとノーマン・メイラー	173
6. <i>The New Yorker</i> とその作家たち	180
1. <i>The New Yorker</i> の特徴	180
2. ジェイムス・サーバーとジョン・オハラ	182
3. 第二次大戦後に登場した作家たち	184
7. ユダヤ系アメリカ作家	201
1. ユダヤ系アメリカ作家	201
2. 教養小説を書きつづけるベロー	204
3. 神秘的な奥行きを持つリアリズム	207
4. 生の危機をドラマにするロス	209
5. 最後の語り手	213
8. その他の作家たち	216

viii 目 次

参考文献	237
事項索引	255
人名・書名索引	259

図 版 目 次

<i>in our time</i> (The 1924 Paris Edition) の口絵とタイトル	facing 56
<i>The Great Gatsby</i> のジャケット・デザイン	// 56
<i>Dos Passos' Path to U. S. A.</i> のジャケット・デザイン	// 57
<i>Light in August</i> のタイトル・ページ	// 57
第二次大戦後のアメリカ小説 (ジャケット・デザイン 1)	// 152
第二次大戦後のアメリカ小説 (ジャケット・デザイン 2)	// 153

I 1910年代のアメリカ小説

井上謙治

1. 概 観

20世紀の幕が開いたとき、アメリカ小説は満足すべき状態になかった。ニュー・イングランドを中心とする文学はすでに活気を失っていたとはいえ、ピューリタニズムに支えられた「お上品な伝統」はいぜんとして根強く、20世紀の現実に即した小説はまだ生まれていなかった。もちろん、1890年代には南北戦争以後の新しい社会的現実に取り組もうとする芸術的な動きが目立ったが、今世紀初頭になるとアメリカ小説は大きく後退していたといえるだろう。自然主義の旗手として前途を嘱目されたスティーヴン・クレインやフランク・ノリスは共に夭折し、セオドア・ドライサーはまだ世に埋もれた存在であった。一方、1890年代にみられたジェイムズ・G. ハネッカー、ヘンリィ・ハーランドたちのコスモポリタンの審美主義文学も、それほど成果を生みだすこともなかった。要するに、20世紀初頭のアメリカ小説は弱々しく、すでにリアリズム文学が爛熟期に入っていたヨーロッパ文学にくらべて、見劣りがするものであったといわねばならない。

もちろん、1902年から1910年前後まで、かの有名な「マックレーキング運動」(Muckraking Movement)があったことは事実である。セオドア・ローズヴェルトの大統領就任とともに始まる「改革の時代」を背景に、社会不正暴露の文学が興り、アプトン・シンクレア (Upton Sinclair, 1878-1968) の *The Jungle* (『ジャングル』, 1906) をはじめとして、デイヴィッド・グレアム・フィリップス (David Graham Phillips, 1867-1911) の *Susan Lenox: Her Fall and Rise* (『スーザン・レノックスの浮沈』, 1917), ロバート・ヘリック (Robert Herrick, 1868-1938) の *The Common Lot*

(『共有地』, 1904), *The Memoirs of an American Citizen* (『あるアメリカ市民の回想』, 1905) などの作品が生まれている。これらの小説は、実業界、政界、労働界などの不正、汚職を摘発し、腐敗した社会倫理を糾弾することによって、社会浄化に対する一般大衆の関心を高めるのに役立った。シカゴの食肉罐詰会社を舞台に、労働搾取と移民労働者の悲惨な生活を描いた *The Jungle* は「マックレーキング」文学の典型ともいえるべきものであり、不潔な工場内部の暴露によって一大センセーションをまきおこし、純正食品・薬品法の成立を促進することになった。しかし、「マックレーキング」そのものは、もともとジャーナリズムを中心とした動きであり、何よりも素材についての情報性を重視するドキュメントの性格が強く、綿密な実地調査による事実の重みと、その背後にある社会不正に対する作家自身の怒りが作品にリアリティを与えているものの、芸術性は二義的なものになり、人物に奥行きがなく、事件もまた図式的なものであった。それは1890年代の自然主義文学者が試みた芸術的実験を発展させたというよりも、むしろ通俗化であり、芸術というよりもルポルタージュに近いものであった。シカゴ大学の英文科教授であったヘリックを別とすれば、マックレーカーの作家たちがほとんどジャーナリスト出身であったことも、彼らの作品の性格を決定するうえで大きな要因となっていたといえるであろう。しかも、彼らは、マックレーキング運動にその最良の部分を出しきったため、それ以後の活動は、シンクレアを除けば、ほとんど不毛であったといえる。けっきょく、マックレーキングは新しい文学を生みだすほどの力を持ちえなかったのである。

しかし、1910年代に入る頃、新しい文学の創造を刺激するような文化的状況が生まれた。1909年にはジグムント・フロイトとユングのアメリカ講演旅行をきっかけに、従来のダーウィニズムに加えて、精神分析が普及し、潜在意識の世界に目が向けられるようになった。ダーウィン、マルクス、フロイト、そして、アインシュタインの相対性理論が、世界と人間についてのアメリカ知識人の観念を変えるようになったのである。20世紀の最初の10年間に、アメリカの文化的状況はにわかに活気づいてきたといえるであろう。こうした変化を象徴するように1907年には *Sister Carrie* がピューリタニズムの束縛から解放され、再び日の目を見るようになり、ドライサーは新興文学の先鋒として脚光を浴びるようになった。一方、ヨーロッパ

パからモダニズムの新しい波がアメリカにも浸透してきた。1912年にシカゴで *Poetry* (『ポエトリ』) が高らかに産声をあげ、続いて *The Masses* (『マッセズ』), *Little Review* (『リトル・レビュー』), *The American Mercury* (『アメリカン・マーキュリー』), *The Seven Arts* (『セヴン・アーツ』) など前衛的なリトル・マガジンが相ついで創刊された。これらの雑誌はフロイト、ベルグソン、イプセン、ニーチェ、バーナード・ショー、H. G. ウエルズなどヨーロッパの新思潮を紹介したばかりでなく、若い作家たちに表現の場を与えることになった。シカゴ・グループが生まれ、グリニッジ・ヴィレッジが活気をおびてきた。この時期は芸術のあらゆる分野で、大胆な実験がみられた。音楽の分野ではシェーンベルク、ストラヴィンスキーが紹介されたし、美術では1913年にニューヨークで「アーモリィ・ショー」が開かれ、後期印象派、キュービズム、表現主義などアヴァン・ギャルド絵画が作家たちにも大きな衝撃を与えた。ヨーロッパの新しい芸術の流入は、それまで地方的であったアメリカ文学に広い視野を与えることになったが、その一方では、アメリカの文学者もヨーロッパのモダニズムの発展に大きな役割を演じていた。すでにヘンリィ・ジェイムズの例があったのはもちろんだが、ガートルード・スタインも新しい文体の創造を目ざす動きのなかで大きな存在となり、詩の分野でのエズラ・パウンドの活躍はいまさら、ここで語る必要もあるまい。モダニズムの運動は、大西洋の兩岸にまたがる国際的なものであり、アメリカ作家の活躍にもかかわらず、アメリカに根づくのが遅かったのは、ヨーロッパにくらべてアメリカでは物質的進歩に関心がむけられていたからである。しかし、モダニズムは芸術的進歩をめざす実験であり、進歩の観念を信ずるアメリカ人にとって、受け入れられやすいものであったといえるであろう。モダニズムはコズモポリタンの性格をもつものであったが、同時にアメリカ的性格をもっていたというべきなのである。

したがって、モダニズムがいったんアメリカに根づくると、非常な勢いで広がっていったのは当然であったといえるだろう。前述のような芸術の諸ジャンルの交流やモダニズムとアメリカの土着的伝統との相互作用の中から、20世紀のアメリカ小説が生まれたのである。

1910年代はアメリカ小説の第2の開花期といってもいいほど、華々しい時期であった。ドライサーは10年間の沈黙を破り、*Jennie Gerhardt* (『ジェ

ニー・ガーハート』, 1911) を発表し、その後 *The Financier* (『資本家』, 1912), *The Titan* (『巨人』, 1914) などの力作によって、クレインやノリスが切り開いた自然主義文学を確立することになる。アメリカの近代化によって複雑になった生活様式はドライサーの都市小説によって克明に描きだされることになったのである。ドライサーの後輩であるシャーウッド・アンダソン (Sherwood Anderson, 1876-1941) は急速に産業主義に侵されてゆく中西部の田舎町の閉塞状況と、そこにうごめく歪んだ人間像をユニークな文体で語った *Winesburg, Ohio* (『ワインズバーグ・オハイオ』, 1919) によってアメリカ小説に新生面を切り開いた。日常性にひそむグロテスクなものの追求は、その後のアメリカ文学の主題を先取りするものであった。

ドライサーもアンダソンもいわゆるシカゴ・グループに属する作家であり、この時期は中西部出身の小説家の活躍が目立った。もともと中西部は南北戦争以後、急速に開発が進んだ地域であり、東部と西部の中間にあって独自の地域文化を持ち、早くからリアリスティックな農民小説を生みだしていた。19世紀末から今世紀初頭にかけて、シカゴの発展が象徴するように、中西部は産業主義の進出が目立ち、ピューリタニズムと伝統的な農本主義にもとづく価値観が崩れかかっていた。こうした状況は「村への反抗」と牧歌的アメリカへの郷愁との間の微妙な緊張関係を生み、地方主義 (regionalism) 小説というジャンルを生みだすことになった。ネブラスカのウィラ・キャザー (Willa Cather, 1873-1947) は *O Pioneers!* (『あゝ開拓者』, 1913), *My Ántonia* (『私のアントニア』, 1918) によって、開拓地に生きるたくましい女性の姿を描き、ミネソタのシンクレア・ルイス (Sinclair Lewis, 1885-1951) は *Main Street* (『本町通り』, 1920), *Babbitt* (『バビット』, 1922) において、小都市のブルジョア文化を諷刺した。一方、南部においても、ヴァージニアのエレン・グラスゴー (Ellen Glasgow, 1874-1945) がヴァージニア社会史ともいべき一連の小説によって、南北戦争以後停滞していた南部文学に活をいれ、その後の南部ルネッサンスへの道を切り開いた。

これらの作家たちは、それぞれが知悉する地域の問題を意識的に取り上げたため地方主義作家と呼ばれている。彼らには、共通してアメリカ伝統の農本的理想主義がみられ、アンダソンを除いて、晩年はいずれも新しい産業的アメリカの現実から逃避する傾向をみせているのが特徴的であっ

た。この点、彼らの抱く価値観は保守的なものであり、彼らは19世紀リアリズムと「失われた世代」(‘the lost generation’)とを結ぶ過渡的な存在であったといえるであろう。しかし、彼らによって基礎を与えられた地方主義文学は、その後1930年代に見事な開花をみせることになる。

一方、新しい時代の流れは東部の伝統的な世界にもおよんでいた。イーディス・ウォートン (Edith Wharton, 1862-1937) は、ニューヨークの上流社会を舞台に、新旧勢力の移り変わりをジェイムズの流れをくむリアリストティックな筆致でとらえた。*The House of Mirth* (『歓楽の家』, 1905), *The Custom of the Country* (『一国の慣習』, 1913), *The Age of Innocence* (『汚れない時代』, 1920) は、ウォートンの知悉するニューヨーク上流階級の生態を細大もらさず写しだした風俗小説であり、理想と因習との葛藤を追求しているが、ここでも、古き良き時代への郷愁が産業アメリカへの批判となっている。

1910年代以後、アメリカ小説はリアリズムが主流を占めたが、もちろんリアリズムといっても多種多様であり、それぞれ作家の個性に応じた独自の手法がみられる。ドライサーは自己の体験をドキュメントのように忠実に記録したし、アンダソンは心理的事実を繰り返しの多い口語文体によって表現しようとした。シンクレア・ルイスはアンダソンと対照的に、視覚的印象を鮮明に写しだすフォトグラフィック・リアリズムを生みだした。またキャザーやグラスゴーは、何もかも取りこむ事物の目録づくりのようなドライサー流の自然主義的手法を排し、素材を選択するリアリズムを目ざしている。一方、ウォートンは風俗の克明な描写で際立っているが、なによりも芸術的完成度を求めている。こうした各人の資質や背景の相違から生じた多様な手法は、それぞれが属する地域の風土、文化に根ざしたものであり、ヨーロッパのリアリズムとは異なるアメリカン・リアリズムの可能性を示したものであった。

しかし、リアリズムの盛んな時代にあって、それに批判的な作家もいた。ジェイムズ・ブランチ・キャベル (James Branch Cabell, 1879-1958) やジョーゼフ・ハーゲスハイマー (Joseph Hergesheimer, 1880-1954) は審美的立場から疑似歴史小説を書き自然主義に対抗した。キャベルの *Jurgen* (『ジャーゲン』, 1919) は中年の質屋が、突然失踪した妻を探して、中世の架空の国に迷いこみ、さまざまな冒険をするという話で、幻想の世界に

美を求める現実逃避であったが、その洗練された文体と、隠微なエロティシズムは、ピューリタニズムからの解放を求め、中産階級のモラルに反抗する若い世代に熱狂的に受け入れられた。ハーゲスハイマーは古き港町セイレムを舞台に、東洋との貿易に従事する一家の運命をたどったロマンス *Java Head* (『ジャバ岬』, 1919) を発表し、エキゾティシズムの世界に美を求めた。キャベルやハーゲスハイマーの文学はネオ・ロマンスと呼ばれるもので、俗悪なアメリカ文化に対する批判を含んでいる点だが、19世紀の大衆的ロマンスとは異なっていた。シンクレア・ルイスは *Babbitt* をハーゲスハイマーに捧げているが、この全く共通点を持たない2人の作家を結びつけるものは、それが社会との正面切った対決であれ、あるいは現実逃避であれ物質文明の繁栄とは裏腹に俗悪化してゆくアメリカ文化に対する批判であったといえるであろう。

1930年シンクレア・ルイスはアメリカ作家として初めてノーベル賞を受けた。これはアメリカ文学が世界文学の重要な一環としてその地位を認められたことを示す象徴的な事件だったといえるであろう。だが、この受賞演説でルイスはアメリカ文学が晩年に達したことを宣言し、ヘミングウェイ、ドス・パソス、フォークナー、ソーントン・ワイルダー、トマス・ウルフ、スティーヴン・ヴィンセント・ベネなど新しい作家の名をあげ、もはやルイスの時代が去ったことを語っている。第一次大戦の経験は若い世代にアメリカ文明に対する批判精神と人間存在についての新たな洞察を与え、「失われた世代」の文学を生みだしていたのである。もはやアメリカ文学がイギリス文学の支流だと考えられていた時代は過ぎ去り、アメリカ文学は名実ともに、世界文学の中で欠くべからざる重要な存在になったのである。こうしてみると、今世紀初頭の20年間は19世紀後半に生まれたアメリカ・リアリズムがその多様な可能性をみせながら、着実に地歩を固めていった時期であり、「失われた世代」によって代表される20世紀アメリカ小説ルネッサンスのための重要な準備期間であったといえるのである。

2. セオドア・ドライサー

セオドア・ドライサー (Theodore Dreiser, 1871-1945) がアメリカ自然主義文学の確立に重要な役割を果たしたことはいうまでもないが、およそ半世紀にわたる彼の作家活動をふりかえてみると、彼を自然主義作家という言葉で割りきって考えることはむずかしい。初期の作品では19世紀後半の社会進化論の影響を強く、その後は超人思想、社会主義思想が入りこみ、晩年になると、共産主義を信じると同時に宗教的回心がみられるのである。そしてドライサー自身は貧者に同情し、社会不正に怒りを感じる一方では、「アメリカの夢」を追う富と名声につかれた矛盾の多い作家であった。

こうしたドライサーの文学を形成したものは、何よりも彼が生まれ育った環境であったといえるであろう。

ドライサーはインディアナ州の新興都市テレホーテのもっとも貧しい家庭で生まれた。ドイツ系のカトリック教徒であった父親は織物業を営んでいたが、工場が火事となり、破産してからは、狂信的になっていた。愛情深く、楽天的な母親は文盲であり、無道德でもあった。しかも彼らにはドライサーをも含め10人の子供がいた。こうした貧困のなかで、物質的欲望を満たすために姉たちは傭い者となり、兄たちも不良化していた。したがって、ドライサーは幼時から、宗教と因習的道德の空しさを体験し、信仰が貧困からの脱出を妨げ、禁欲を強いる躰けが、かえって欲望をかきたててることを知ったのである。いってみれば、彼は生まれながらにして自然主義文学の世界にいたのである。良家の出であるスチーヴン・クレインやフ